

釧路川の「渡船券」について

石川 孝織*

このたび、室内昭三氏（札幌市内在住・2ページ「巻頭言」も参照）より、戦前期のものと思われる「釧路川・頓化・佐々木」と書かれた『渡船券』を寄贈いただきました（写真）。「頓化（とんけし）」は、現在の浪花町・寿・南浜町などを範囲とする旧地名です。

室内氏は1928（昭和3）年釧路市に生まれ、戦後、釧路臨港鉄道に入社、社命で関連会社の幸楽運輸（札幌）に転籍する1971（昭和46）年まで釧路に在住。当館とも交流があり、館報1963（昭和38）年11月号（142・143合併号）に掲載の室内氏による報告「春採湖畔の蝶」は、春採湖での最初の昆虫の学術記録でもあります。2019（平成31）年4月、太平洋石炭販売輸送臨港線の休止時（同年6月末廃止）に開催された「さよならセレモニー」（筆者が「釧路臨港鉄道の会」会員として従事）に参加され、以来、当館へ資料や写真、情報の提供をいただいています。

釧路の南北・釧路川の兩岸を結ぶ橋として1889（明治22）年から愛北橋が架けられ、さらに1900（明治33）年には初代「幣舞橋」が完成、数度の掛け替えを経て、今も重要な役割を果たしていますが、補完する交通手段として、渡船（渡し舟）も運航されていました。1950年代まで運航されていたようで、1950（昭和25）年の地図（下図）の裏面には「片道1人5円」との記載もあります。

この寄贈について、北海道新聞（2020（令和2）年5月4日付・今井潤記者）にて報道されたところ、市内在住の金沢貞子氏より「親類が当時運航にたずさわっていた」と博物館に連絡があり、後日お話を伺いました。

■金沢貞子氏（旧姓鈴木・1936〔昭和11〕年生まれ）の証言

「マルニ佐々木」（筆者注：水産加工や物流業を手広く経営）の分家、「カネカワ佐々木」が渡船を運航していた。当時、炭山（太平洋炭砒）の人たちが多く利用していた。釧路臨港鉄道の入舟町駅から渡船に乗り換え、釧路川を渡り街へ出る。

その後体調を崩したのか、父（鈴木竹蔵）の義兄だった「カネカワのおじさん」から、父の実兄、鈴木松蔵の運航に代わった。

戦後も運航していたが乗客は次第に減り、

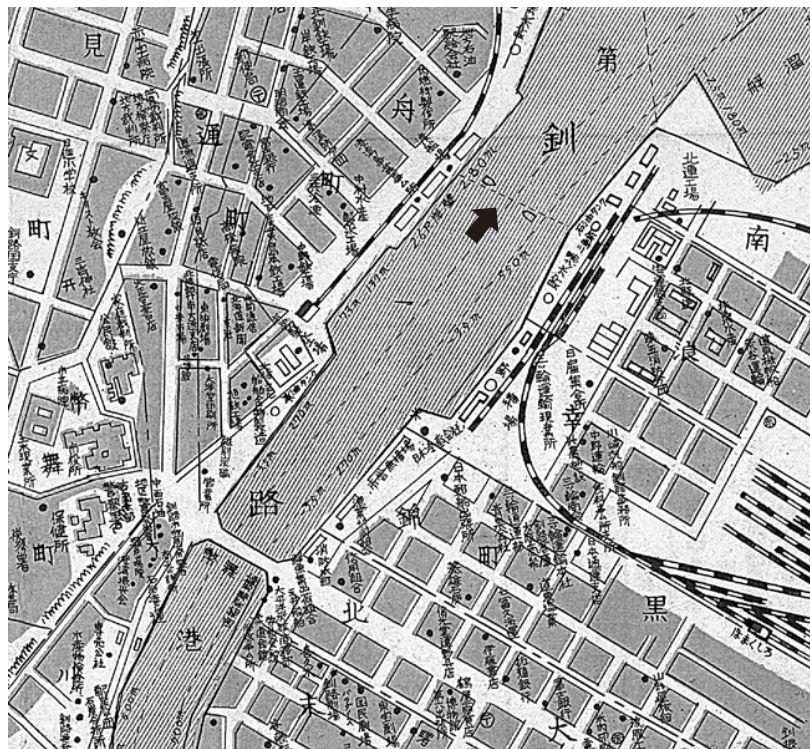
*釧路市立博物館

父と博物館長の片岡新助氏が友人だったこともあって、松蔵は鶴ヶ岱公園のひょうたん池でボート屋をはじめた。ボートも自分でつくってしまう器用な人だった。久寿里橋が工事のため通行止めになったときは、代わりとなる渡船の運航を請け負っていたこともあった。

市街地の交通に関する資料というだけでなく、生活に密着した「普段使い」のものほど後世に残りにくい（用が済めば捨てられてしまう）という点からも、貴重な資料といえます。関係する資料や証言などをさらに集めたいと考えていますが、まずは皆様に見ていただくべく、新着資料ミニ展示「釧路川の『渡船券』」を開催しました（会場：博物館1階マンモスホール：2020（令和2）年8月1～30日）。



写真：渡船券
戦前期 ×1.0
室内昭三氏寄贈・当館蔵



図：「釧路港案内」（部分）釧路市役所発行・地図縮尺1万分の1 1950（昭和25）年 ×1.0
矢印部分が渡船